
勇者な俺と魔王なあいつ。

月島 真昼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者な俺と魔王なあいつ。

【Nコード】

N9102R

【作者名】

月島 真昼

【あらすじ】

バトル物が書きたくなったから書いていた。それだけ

とある砂漠のオアシスで。

俺は敵との間にまっすぐに壁を作るように剣を構えた。息を吸い込む。敵を見る。一見して優男だ。とてつもなく整った顔立ち。細い体に魔力を込めて折られた灰色の闘衣を纏っている。人間の遺伝子では絶対に発現しない水銀色の髪と黒白が逆の瞳が、そいつが人でないことを示している。

「ええとさ、最初に聞いておくけど、君ってなににきたの？」

「お前の討伐だよ。魔王ムラクモ」

「へえ、ああ、ううん。……そっか、わかった」

女と間違うほど透き通った声と安穏な口調が妙に釣りあっていない。なんか妙に勘に障るやつだ。とりあえずいまはなんでも殺気を高めるための材料にしよう。なんか唐突に両手を上げた。

「じゃあ、降参するよ。君の仲間にいれてくれ」

「は？」

気が少し揺らいだ感じがするが、この程度で殺気を消すほどやわな鍛え方はしていない。なにせ俺ってば、勇者なのだ。悪魔殺しが本業だ。金のためだ。が、命がけの仕事なのは間違いない。

「魔王やるのって、結構めんどくさいんだよ。序列争いとか興味ないのに、ノルマ達成しなかったらもつと強い魔王に殺されるし、だからって他の魔王はみんな楽しんで人間を狩ってるからストライキできるほどの戦力は集まらない。仕方ないからこうやって人間の町に近いところでオアシスを占拠して、殺害数を確保しようとしてたけど、ほら、君みたいなのがくるだろ？ 飼いきれんとかごめんだ。

僕は君の仲間になって他の魔王に反逆する！」

「……ごめん、俺、お前のこと仲間にしたくない」

「ええ?! 世界を制圧した暁には半分を僕に寄越せなんて言わないよ、僕。結構強いよ! いいやつだよ!」

「知るかよ。とりあえず金のために死んでくれ」

「はあ。まあいいだろう。戦うことで僕が強くてかっこよくて仲間にするにとてもメリットがあることを証明しようじゃないか」

オアシスから大量の水が持ち上がった。ムラクモの背後に浮かぶ。俺は大きく息を吸い込んだ。

「さあ、かわいい僕の従僕たちよ。あの子をほんの少し痛めつけてあげて」

九本の水流が凄まじい速さでバラバラの軌道を描いて俺に殺到する。バカ速い。どうやらムラクモは相当なレベルな水属性魔術の使い手らしい。ムラクモの使っている魔術は水属性下級魔術「フロー」なのだがどうみても下級魔術の威力とスピードではない。

「フォローウインド、オン」

だが俺はもっと速い。砂を蹴って加速し、水流を置き去りにしてムラクモから左に離脱。そのまま超加速状態を維持して突撃する。

風属性中級魔術「フォローウインド」は集めた風をジェット噴射して移動速度を圧倒的に増大させる。ワンテンポ遅れて九本の水流が力を無くし、砂漠に染みこむ。

（別の魔法に切り替えたか？）

フローでは追いつけないと判断したらしい。俺は一瞬ブレーキを踏み、ムラクモの背後の水が上空に移動しているのを確認。さながら断頭台のように垂直に降り注いだ水が砂を打つ。水そのものは回避できたものの、飛沫が弾丸じみた勢いで襲い掛かる。肩口と脇腹に衝撃を食らいながらもフォローウインドを維持。領域外に逃れつつ回り込み強引に間合いを詰める。

「ああ、まずいなあ」

どこまでも緩いやつだ。切り上げ気味に剣を振るう。急所を狙ったのだが腕一本を吹き飛ばしただけ。ムラクモは逆の手で水で生み出した剣を振るう。俺は風を噴射。即座に間合いを離れる。が、距

離をとりすぎたことに気づいたのは詠唱が聞こえてきてからだ。いま逆噴射すれば俺の体が圧力に耐え切れずに死ぬ。遅い、思いながらブレーキを踏む。俺はフォローウインドを解いた。

「――抑圧、節制、雨の大蛇。大いなる流れ。億の礫を持って人の名を正す」

上級魔術。詠唱から判断するが術名までわかるほど俺は魔術に聡くない。だが距離的に中々遠距離系であることが理解できれば充分だった。

『神々の魔剣は十六振り存在する』

水で作られたそれぞれ形状の違う異様な大剣。攻撃範囲は恐らくフォローウインドまで含めた俺の回避領域を軽々と凌駕しているだろう。

(間に合うか……!)

焦りから俺は詠唱を早めた。

が、水の大剣は飛来しなかった。

「なんの真似だ？」

「いや、これまで披露すれば僕がどれだけ役に立つか理解して貰えたかと思って。ねえ、仲間にしてよ」

「やだっつってんだろ」

「つれないなあ。これ撃ったら君、死んじゃうよ？ まだ死にたくないでしょう」

「死ぬかよ。やってみろよ」

構築が終了。俺は剣を構える。

「わかった。君を殺して僕は次の勇者を待つよ」

十六の魔剣が降り注いだ。攻撃範囲はやはり圧倒的に広い。天蓋を覆い尽くすほどだ。いいや、フォローウインドによる回避をあれだけ見せ付けられれば、攻撃範囲を広く、そして威力を薄く設定せざる

を得なかったのだ。

「次元断、オン」

俺は全速で剣を振るった。引き裂かれてほんの一瞬裂けた大気の威力に魔力を加え増大させる。生まれたのはリーチは短いながら全魔術中でも最大級の破壊力を持つ真空刃。風属性上級魔術「次元断」の威力はいかに魔王が相手で魔力自体に差があるとはいえ、広範囲に力を散らした「神々の魔剣は十六振り存在する」を遥かに優越する。

容易に粉碎、水の剣は虹を残して大気中に消失。俺は次元断を解除。フォローウインドを発動し、ムラクモの真っ直ぐに胸を突いた。「余計な口上をいれずに即あれを使ったらお前の勝ちだったかもしれないのにな」

次元断の詠唱は間に合うかなり微妙なラインだった。急所を貫かれたムラクモは口端から血を流しながらわずかに笑みを浮かべ――霧散した。

「……は？」

「いやあ、君強いね。参った参った」

肉体を水と化したらしいムラクモが俺の剣の間合いから数歩先に結集。水属性の魔術らしいが俺はこんな術を知らない。どうやら純物理、及びに風系の攻撃をほぼ無効化できるように見える。炎や特質系の魔術ならダメージを与えることができるのかもしれないが、風属性に特化した俺はそれらの魔術を使うことができない。

「なんじゃそりや……」

「だから僕、強いんだって。まあこの状態だったらこっちからの攻撃もほとんどできないんだけどね」

へらへら笑う。こいつほんとに勘に障るな……。

「さあ、こんな素敵で無敵な僕を仲間にしたくないかい？」
「したくない……。したくないけど……」

「わかったよ……。仲間にすればいいんだろ」

俺はこいつに勝てない。負けないけど、勝てはしない。というこ

とはこいつにかかった報酬を受け取るとはどうあがいても不可能だ。なら仕方なしでもこいつを仲間にするのが現状では一番利口な選択肢になる。

「やったああああ。これからよろしくね！」

なんか無邪気にはしゃいでる。

ぼっちな俺になんだか魔王な仲間ができましたとさ……。

(後書き)

楽しんで書けたらそれが一番だと思うんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9102r/>

勇者な俺と魔王なあいつ。

2011年3月25日12時55分発行